

第6章 地域通貨について

第1節 私の考える地域通貨

私は、長年にわたり地域の勉強をしてきて、いろんな場で書いてきている。まずそれを一瞥してもらいたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tuukakei.pdf>

上のPDFファイルは一瞥してもらっただけでいい。それらを読んでも地域通貨の理解はなかなか得られないと思う。私に説明能力が欠けていたからだ。また、地域通貨については、多くの本があるが、これらを読んでも地域通貨の理解はなかなか得られないと思う。彼らは、アカデミックであっても、どうすれば地域通貨が流通するか、その点にまったく触れていないということと、地域通貨が流通すれば地域がどう変わるのかということをもっと説明していないからだ。

地域通貨が流通すれば地域がどう変わるかということは、私も説明できていなかったのであるが、その点がいちばん大事な点であると現在は思っている。ここではそこに重点を置いて説明するが、その前に強調しておきたいことは、地域通貨というものは、ある特定の地域でしか使えないものであるし、「円」と交換できないものである、という点だ。したがって、地域通貨というものは市場原理が働かない。もちろん、地域通貨と「円」は併存し得る。地域通貨の流通する地域は、市場原理の働く部分と市場原理が働かない部分のあるハイブリッドな経済社会と考えてもらいたい。いろいろと詳しい説明に入る前に頭に入れておいていただきたいことがもうひとつある。それは、地域通貨が通貨である以上ものの値段というものがあると考えるのもいい。しかし、通常、その値段は、売り手が適当につけるし、値段の引き下げ交渉が頻繁に行われるので、値段があってないようなものである。では、そういった地域通貨の本質を説明した私のYouTubeがあるのでそれを聞いてもらいたい。

<https://www.youtube.com/watch?v=-phAqQeSOq4>

さらに、私の考える地域通貨の説明をしよう。私の考える地域通貨は、通常の通貨「円」と違って、野菜を主体にして、日常生活用品の売買を行うものと考えてもらいたい。もちろん、その応用動作もいろいろあるのであるが、その点については後ほど述べるとして、とりあえずは日常生活用品の売買に焦点を絞って話をしよう。

私の考える地域通貨は「野菜本位制」である。したがって、家族農業をしている人に働きかけて賛同を得なければならないが、その際に大事なことは、家族農業をしている家族がどんな日常生活用品とかサービスを欲しているか、ということである。それを聞きながら、その要求に応じることができるよう、多くの人に働きかけなければならない。野菜と物々交換してもいいという人を募るわけだ。地域通貨は、通貨を使つての物々交換だと考えてもらいたい。野菜と物々交換してもいいという人が、例えば、パン、味噌を作っている人が出てきて、農家の野菜と物々交換してもいいと言ったとしよう。ところが、野菜農家は、それだけではあまり気乗りがしないという。そこでネゴシエーションが始まり、あなたの家の手伝いをする人を探し出すかどうかと言う。それなら良い。是非そうして欲しいということで、農家の手伝いをする人を探し出す。ようやく見つかつて、地域通貨を使つての物々交換をする人として、野菜農家とパンを作る人と味噌を作る人、農家の手伝いをする人3人で、「地域通貨愛好会」が発足する。そこまで辿り着けばしめたものだ。あとは、地域通貨を発行する組織体を作つて、地域通貨を使つての物々交換を始めればいい。この段階の問題は、その交換を行う場所の問題である。野菜農家とパンを作る人と味噌を作る人が比較的容易に行くことのできる場所があるかどうか？もし良いところがあれば、野菜農家の希望を最優先として、パンを作る人と味噌を作る人の同意を得なければならない。この場所の問題が私の考える地域通貨を成功させる最大の問題であり、それを解決するために、合理的な知恵がいる。のちほど秩父において私の考える地域通貨を流通させる場合の「交換の場所」の問題について話をするが、ここでは、場所の問題が解決したとして話を続ける。

極めてささやかな形でも地域通貨を使つての物々交換が始まれば、あとは会員を増やすだけだ。会員はねずみ算式に増える筈だ。一般の個人商店でも毎日野菜は食べるので、その範囲内でバター、ソーセージ、コーヒー、砂糖など日常生活用品を出品してくれる商店が出てくる筈である。家で食べる野菜の範囲内で、サービスを提供してくれる理髪店や美容院も出てくるだろう。

このようにして、私の考える地域通貨による物々交換が盛んになっていくのである。ご理解いただけたであろうか。私は、地域通貨の実現が難しいとは思わないのである。地域通貨が力強く流通するようになれば、その地域はイキイキとしてくる。多くの家庭で、「モノづくり」が始まるのである。私の考える地域通貨による物々交換で日常生活用品と自分の作った「モノ」とを交換するために地域の「モノ作り」が始まるのである。ここで、あえて「モノ」という言葉を使つたのは、各家庭で作る物には、作った人の心が籠っており、それは単なる物質ではなく、「モノ」というのがふさわしいからである。私の考える地域通貨による物々交換は、人びとの心の行き交う交換であり、それは正に贈与の世界である。

地域通貨によって、弱者切り捨ての市場原理で動く社会が、弱者もイキイキと生きてゆける贈与の社会に変わってゆくのである。

この点については、地域通貨の第一人者である西部忠が次のように言っている。すなわち、

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tuukakou.pdf>

第2節 地域通貨による秩父神社の「市」

私は第5章第9節で次のように述べた。すなわち、

『 今後とも秩父神社が祈る国日本の模範的な神社として今後とも発展することに大いなる期待を示し、大市でなくて小さな市でも良いから、秩父地域の元気再生のため、何らかの形の「市」が秩父神社の力によって開かれることに大きな期待を寄せたものである。そこで、私は、ここで自問自答をしながら、これからの時代を先取りする、まったく新しいタイプの「市」が開催できないかどうか、考えてみた。これは私のまったくユニークな提案であるが、「**地域通貨による市**」を提案した。如何にそれを進めるか、第6章でその説明をしていきたい。』・・・と。したがって、この第6章第2節では、秩父神社の「市」を具体的にどう進めるか、その説明をしていきたいと思う。

秩父神社で行なう「地域通貨による市（以下妙見市）で流通する地域通貨の名称を仮に「地域通貨妙見」と呼ぶことにしよう。

「妙見市」の発展段階を、発足段階、成長初期段階、成長最終段階、成熟段階の四つに分けて、その問題点と解決方法をを説明したい。

1、発足段階

まず、「秩父神社妙見市」の推進期成同盟会（以下同盟会）と地域通貨妙見に参加する「地域通貨妙見愛好会（以下愛好会）」をそれぞれ作らなければならない。同盟会のメンバーは、イメージとして15名ぐらいが良いかと思うが、それらのメンバーは妙見市の趣旨と地域通貨妙見の本質と流通の仕方を十分理解しておく必要がある。その上で、それぞれ分担して、家族農家、パンやミソなど家族農家の望む日壽生活用品を作ってくれる人を見つけなければならない。家族農家の数のイメージとしては3農家ぐらいか。必要があれば、家族農業やパンづくりなどのお手伝いをしてくれる人を数人見つけなければならない。

その上で、農家の出品してくれる毎日の野菜の量に応じて、需給調整をして、パンやミソなどの出品の量の見通しをつける。妙見市は、毎日行なう市だが、地域通貨妙見を使って

の物物交換みたいなものであるが、この発足段階では、地域通貨妙見を発行しないで、帳簿方式で行なう。

場所は、秩父神社境内もしくは近くの適当なところとする。

2、成長初期段階

細々としたものであっても、妙見市が始まれば、とにかく粘り強く一年間はそのままの状態が続けることが肝要だ。その間に、ボランティアに手伝ってもらいながら、妙見愛好会の農家は野菜の増産に勤めることとする。一年経てば、それら農家の出品量も増えるだろうし、新たな家族農家が愛好会に入ってくれるかもしれない。一年ほど立った段階の課題が二つある。ひとつは、農家の売った野菜の量に応じたパンなどの日常生活用品の量も増やさなければならないという問題であるが、これは同盟会のメンバーの活動で比較的容易に解決するだろう。大きな課題は、農家の出品する野菜の応じた買い手の数だ。この新たな人たちは日常生活用品の生産者ではなく、一般客である。当然、この一般客も地域通貨妙見で野菜を買う訳だから、この段階では、帳簿方式ではやっていけない。どうしても「妙見」というお札（さつ）を発行しなければならない。地域通貨妙見の発行は同盟会が行なう。では一般客はどうしてその発行された地域通貨妙見を手に入れば良いのか、という問題がある。そこがきわめてユニークなところであるが、妙案がある。

妙見市は秩父神社境内もしくはその近くで行なうので、一般客は秩父神社に朝のお詣りをしてお賽銭を上げる。人それぞれがどれだけのお賽銭を上げたかはまったく判らないが、帰りには社務所で同盟会の人一日分の地域通貨妙見を手渡す。お賽銭の多寡に関わらず、みんなに平等に・・・だ。それでもって一般客は妙見市で一分の野菜を買えば良い。一般客に損はない。得をするのは秩父神社だ。それで良いのだ。

3、成長最終段階

2の段階は2～3年続ける。この妙見市に参加している農家にはどんどん地域通貨妙見が貯まるだろう。それを使ってボランティアに手伝ってもらい、野菜づくりの拡張を図れば良い。自分の家の農地が狭ければ、工作放棄地を借りて野菜づくりをやれば良いのである。野菜のみならず、妙見市に出品する農作物や酪農品を作ることがあるかもしれない。4～5年後には、工作放棄地を相当使うことになるので、野菜の生産量が増えてますますその農家に地域通貨妙見が貯まってしまう。この段階になれば、同盟会が母体になって、資本家を募り地域経済活性化株式会社（以下活性会社）を創建する必要がある。ここところがハイブリッド経済の面白さである。その活性会社は、地域通貨妙見の有り余っている農家からそれを預かって、人を多く雇っている地元企業に然るべき量の地域通貨妙見を寄付する。その企業は、借りた地域通貨妙見を使って人件費の削減を図ることができるであろう。ということは多少なりともその企業の経営が楽になるということであり、収益が増すであろう。それに応じて、その企業は、活性会社に成り代わって農家に返しをする。地元企業それぞれに得意な仕事があるから、その仕事で以てお返しをすれば良いのだ。地元企業で私が主としてイメージするのは大工さんを抱えた建築会社である。そういう建築会社であれば、農家の家の修復や改築に手を貸すことができる。

秩父地方の工作放棄地が少なくなって、活性会社が発足し、かつ、地元企業が野菜農家にお返しをする段階、それが成長最終段階である。

4、成熟段階

3の段階をすぎれば、地域経済愛好会のメンバーである農家は、もはや余分な地域通貨妙見の使い道がない。後は、活性会社に預けるだけだ。活性会社は、秩父地方以外の地域に働きかけて、ボランティアを募り、地域通貨妙見によるボランティア活動を行ってもらおう。地域通貨妙見によってボランティア活動を行なうボランティアは、地域通貨妙見によって野菜その他の日常生活用品を買うことができる。問題点は、果たしてそのようなボ

ランティが集まるかどうか、ということである。何か秩父の人たちと一緒にやって面白く、かつ、有意義なボランティア活動を作らなければならない。

秩父地方には他の地域にはない三つのすばらしい特徴がある。祭、秩父銘仙、自然環境の三つだ。

秩父地方では処々方々で多くの祭をやっているので、東京などのボランティアが秩父にやって来て、それらの祭のお手伝いをすることによって、地元の人との心の通い合う交流ができれば、東京などのボランティアは結構喜んでくれるのではないか。

また、秩父銘仙は、外国人も注目するすばらしい織物であるので、今後、秩父はその宣伝に勤め、秩父銘仙の新たな発展を期さなければならない。小鹿野の小鹿荘では、今年（平成27年）の春、秩父銘仙の展示会とお茶会をやられたので、秩父銘仙姿で私も参加したが、結構楽しかった。そこで私は思ったのだが、秩父の観光客が、秩父銘仙の貸衣装をきて、秩父銘仙の展示会とお茶会に参加し、その後、みんなで行列をなして秩父神社にお詣りしたりするようなことがあれば良い。東京などのボランティアにもできるだけ多く参加していただき、そういった行事を盛り立ててもらったら如何であろうか。

さらに、秩父の自然環境を良くするさまざまなボランティア活動が必要である。現在、「荒川の清流を守る会」というのがあって、何とか秩父の鮎を取り戻すための運動をやっておられるが、私もそれに参加している。そこで思うのだが、秩父では、荒川環境だけでなく、他にもいろいろ取り組むべきことがあるのではないか。例えば、植樹だ。山や空き地を利用して、ドングリの木を植えるとか、花の木を植えるとか。植樹祭も必要だろう。植樹祭には皇室をお招きすると良い。何せ、秩父神社の祭神に秩父宮がなっておられるのだから……。植樹には東京などのボランティアの力を借りることが必要である。

東京などのボランティアの力を借りて、秩父がイキイキとしていく段階、それが妙見市の成熟段階である。

第3節 秩父の未来に期待

私の考える地域通貨の一義的な効果は家族農業が生き生きと復活してくるところにあるが、社会的な効果はそれだけにとどまらない。地域通貨による秩父神社の「市」が行なわれるということは、地域通貨が流通して、ボランティア活動が活発に行なわれるようになるということでもある。

「地域の人びとのための地域の人びとによる地域づくりを進める」ためには、ボランティア活動が不可欠であるが、ボランティア活動が活発に行われれば、秩父の地域づくり全般において秩父が自立社会に生まれ変わるということであり、国からの交付金や補助金に頼らなくとも秩父は自立的な経済社会を維持していけるということである。その上で、国からの交付金や補助金があれば、秩父は力強く経済発展をするようになるであろう。

私は、相互扶助の原理の働くボランティア経済（贈与経済）と競争原理の働く市場経済とのハイブリット経済を提案している訳で、そういう秩父の未来を夢見ている。そして、その夢が必ず実現することを信じて疑わない。西部忠が「地域通貨の効果はコミュニティの再活性化にある」と言っているように、地域通貨が流通すれば地域は変わらざるを得ないが、私の夢見る秩父の未来は、強者と弱者とがともにイキイキと生活する地域なのである。